


 巻頭言

## 専門日本語教育研究の一方向（4）

### 日本語教育での失敗を考える

専門日本語教育研究会会長

.....

大坪 一夫

(麗澤大学外国語学部教授)

2002年12月9日に「失敗学会」という学会が設立されました。以前から失敗とは何かということに関心があったので、こんな学会ができたのかと大いに興味をそそられました。この学会の設立の主旨は、「負のイメージが付きまとう失敗は誰も経験したくないことだが、失敗を忌嫌い、原因究明を怠たり、失敗を隠したりすることが次の失敗を招く。失敗から何も学んでいないことが致命的な事件・事故が続く原因である。昔から「失敗は成功の母」と言うように、私たちの身近で起きる失敗を否定的にとらえるのではなく、失敗の法則性を理解し未然に防止すれば次の成功に導くことができる。失敗体験を積極的に学ぶ「失敗学」の重要性を強調するのはこのためだ。失敗は予測できるのです」と会長の畑村洋太郎氏は、述べています。失敗の中には、失敗したくても、できないものもあります。スペース・シャトル・コロンビアの空中分解は、日本人には経験できません。その結果、宇宙開発技術の面では、日本はアメリカにドンドン引き離されていきます。

話は、急に飛ぶのですが、今、私の頭の中で私の経験した日本語教育の歴史は、3つの時代に区分されます。1番目の時代は、徒弟時代です。私は、この時代の日本語教師で、親方のやっていることを盗んで、どう教えるかを身につけた世代です。私が日本語教師になったころ、文部省は、日本語教師を養成しようとは全く考えていませんでした。ですから、私は、周りの人に教えてもらったり、学生に苛められたりして、徐々に教師として使い物になるようになってきたというのが実情です。

2番目の時代は、翻訳時代です。オーストラリアで読んだ修士論文に次のような一節がありました。この論文の執筆者は、日本語のブラッシュ・アップのために日本のある機関に留学して「その機関では、XX先生の教授法に1字1句忠実に従って日本語を教えていたことに驚いた」。そこまで徹底的ではないと思いますが、外国語で書かれた教授法が金科玉条のように守られていた時代がありました。ここで私が言いたいことは、翻訳はだめだということではありません。翻訳であれ、日本語で書かれた教授法であれ、いずれにしてもヒントに過ぎないということです。フランス語を学ぶ英語母語話者に対する良い教え方が、中国語を母語とする日本語学習者に全くそのまま良い教え方になるとは、到底思えません。この時代は、幸い短期間で終わりました。

3番目の時代は、今始まろうとしている時代です。日本語教師養成機関は、文化庁の日本語教育実態調査によれば、「平成13年11月現在、日本語教師養成課程・コースなどは、国公

私立の大学の学部で 134、大学院で 10、短期大学で 18 となっており、これらの機関における受講者数は 20,924 人となっています」。博士号を持つ日本語教師が現場に立って日本語を教える時代に入ろうとしています。そういう時代になったのだなあと感動するのは、私 1 人だけではないだろうと思います。

そこで、失敗学との関連は何かという話になります。畑村会長は、失敗を「こうなるだろうと思って行動したが、はじめに定めた目的を達成できないこと」と定義します。この定義を日本語教育に当てはめると、次のようになります。「できない学生は作るまいと思って授業を始めたが、できない学生ができてしまった」。これは、定義上失敗です。われわれは、この失敗に慣れすぎているのではないかという気がするのです。できない学生ができてしまったことに対して、こう弁解することも可能です。「学生にやる気が無い」。しかし、やる気を起こさせられなかったのが自分なのだとすれば、上の弁解は、やはり弁解に過ぎないのではないのでしょうか。このことをはっきり認識してこそ、失敗を成功の母にできるのではないのでしょうか。そして、今の問題ならば、「どうしたら、学生にやる気を起こさせられるのか」という問題が生まれます。この問題には、英語教育の世界でかなりの研究が進められており、また、その追従者として、日本語教育の世界にも研究が存在します。しかしながら、この問題の発見者が日本語教育の世界から生まれなかったことが問題です。失敗を素直に失敗と認めることによってのみ、質の良い問題を発見できるのだということは、肝に銘じておきたいものだと思います。

さて、いよいよ本題です。私の目には、日本語の教師の研究がどうも何を教えるかという方向に偏りがちなのではないかという風に見えます。一度、この点を明らかにする必要がありそうに思えます。失敗学風に問題を述べれば、「何を教えるべきかの研究をすれば、学習者が簡単に専門日本語を学習できるようになるだろうと思って研究を始めたが、学習者は、専門日本語を簡単に学習できるようになってきたか」となります。会員の皆さんは、この質問にどうお答えになるでしょう。

